

日本古典文学大辞典

第三卷



さ—せ

岩波書店



日本古典文学大辞典

第三卷

岩波書店

日本古典文学大辞典 第三卷  
第三回配本(全六卷)

一九八四年四月二〇日 第一刷発行

定価 一三〇〇〇円

編集者 日本古典文学大辞典  
編集委員会

発行者 緑川 亨

発行所 千101 東京都千代田区一ツ橋二-15-15  
株式会社 岩波書店

電話 〇三六五-1411  
振替 東京六三三二四〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© IWANAMI SHOTEN 1984  
Printed in Japan

# 第三卷

さ—せ



七

齋院 さいいん 「いつきのみや」ともいう。

賀茂神社に奉仕する未婚の内親王または女王。またその御所をもいう。葦子の乱が起った大同五年(八〇)四月嵯峨天皇皇女有智子(みち)内親王が奉仕したのにはじまり、後鳥羽天皇の皇女礼子内親王までで廃絶。【儀制】天皇の即位ごとに選定され、卜定して賀茂齋王とする。卜定が終ると、使を遣わして齋王に伝え、その由を賀茂社に奉告する。大内裏の内に齋王の居所を定め、これを初齋院と称する。所司があらかじめ禊地を点定してこれを奏する。齋王は禊所にいたり、河水に臨んで禊事を修し、その後、初齋院に入る。初齋院には賢木を樹て注連を引き、不浄および仏事を禁ずる。潔齋すること三年の後、四月上旬吉日を選び野宮の齋所に入る。後また潔齋の儀をおこなってから齋院に入る。齋院の御所(本院)は山城国愛宕郡紫野に在ることから紫野院とも称し、また、有栖川のほとりにあることから有栖川とも呼ばれる。四月の中の西の日または下の西の日におこなわれる賀茂祭に供奉する。この日、齋王は輿に乗り禊所に向う。齋王は下賀茂神社、ついで上賀茂神社と両社に参向する。この祭には御禊・警固・還立(かきり)の儀がある。帰路は、神

館を出て上賀茂・鞍馬道を南西に進み、丹波路と合して大宮大路を南下、雲林院知足院を通過して齋院に帰着する。齋院は天皇の即位ごとに選定されるの原則とするが、選子(みち)内親王のように円融天皇から後一条天皇まで五代にわたって齋王であった例もある。また、齋院の事をつかさどる役所を齋院司といひ嵯峨天皇の弘仁九年(八二)に置かれたのをはじめとする。【齋院と文学】一般的にいつて、才媛を多く集めた齋院御所には男性貴族もしばしば訪れ、そこが文学の享受や創造の場となることも珍しくなかったと想像される。六条齋院と呼ばれた祿子(みち)内親王の御所などはその一つの典型と見られる。大齋院選子内親王・萱齋院(式子(みち)内親王)のように自身すぐれた歌人も現われた。『枕草子』『源氏物語』『狭衣物語』などの文学作品にも、齋院はしばしば登場する。↓齋宮 (山中 裕)

西翁十百韻 さいおうしひやくうん 二冊。俳諧。西翁(宗因)作。外題「西山宗因千句」。標題は内題による。寛文十三年(六五三)刊。本書は、初めに仙編「落花集(寛文十一年刊)の付録一冊として刊行されたのであるが、宗因風が大流行の勢いを見せたので二冊本にして単行したもの。【内容】万治(六六三)ごろから寛文中ごろにかけて成った宗因の独吟百韻十卷千句ではない)である。作風は年代のばらつきがあり一様でないが、万治期の作品にも宗因風の特徴が現われている。また最後の「恋誹諧は、恋愛に自己を開放する男女の心情・姿態を生き生きと詠出し、談林新風の到来を予告している。宗因の最初の作品集として大好評を博し、短期間のうちに版を重ねた。なお、十巻のう

ち数巻が写本として伝えられ、若干の異同が見られる。【複製】近世文学資料類従・古俳諧編28(加藤定彦解題)。【翻刻】俳諧文庫「芭蕉以前俳諧集・下」。古典俳文学大系「談林俳諧集(一)」。[加藤定彦]

【参考文献】米谷巖「宗因における謡付一宗因千句について」(『近世文学稿』昭和34年12月)。○加藤定彦・雲英末雄・妹尾武・田中善信・復本一郎「西翁十百韻(論稿)(九)」「文芸と批評」昭和43年7月(46年10月)。○江藤保定「宗因千句論考」(『近世初期俳諧論考』昭和52年)。

柴屋寺奉納発句 さいやうじほうなつはつく 一冊。連歌。

土橋良恵編。元禄十年(六八七)里村昌陸序。西山昌札跋。半紙本。【内容】元禄八年正月、宗静(はら)が宗長の旧跡柴屋寺を訪れ、撰津平野に帰った後、同志を語らい、集まった連歌発句に自作を加えて都合一二七枚を、元禄十年に柴屋寺に奉納、のち父の志をついだ良恵が上梓したもの。作者は宗静のほか里村昌陸・同昌純・西山宗春・同昌札・岡西惟中・伊藤道清・西脇利房ら。その短冊は各、自筆で、静岡市丸子の吐月峰柴屋寺に短冊帖に貼られて現存(うち一枚欠)。【翻刻】『仮名草子と西鶴』(岸得蔵、昭和49年)。[島津忠夫]

西園寺公経 さいおんじこうけい 鎌倉時代の歌人。

法名、寛勝。鞍絵大将・今出川太政大臣とも称す。藤原氏公季流。内大臣実宗の男。母は権中納言藤原基家の女。室は源頼朝の妹智一条能保の女全子。実氏はその子。姉は藤原定家の室。寛元二年(二四四)八月二十日没、七十四歳。【事蹟】治承三年(二二七)従五位上。左近中将・藏人頭・新院(後鳥羽)別当・参議等を経て、貞応二年(三三三)従一位太政大臣。寛喜三年(三三三)明恵を戒師

として出家した。幕府に近かったため、承久の乱の際は後鳥羽院により幽閉され、一時は生命も危険だったといひ(承久記)、伊賀光季を通じ鎌倉に内通したともいう。また女が関白九条道家の室で、その腹に撰家将軍頼経が生れた関係で、乱後は九条家と共に権勢を極めた。建仁元年八月十五夜撰歌合、千五百番歌合、建保四年(三三三)百番歌合、道助法親王家五十首和歌等の作者となった他、西園寺三十首を主催し、自らも「山桜峰にも尾にも植ゑおかみぬ世の春を人やしこのふと」(新勅撰集・雑一)と詠じた。『正治二年初度百首』の折には、定家が作者に加えられるよう尽力し、『新勅撰集』撰集の折にも定家のため尽くすところが多かった。なお、『小倉百人一首』の作者でもある。勅撰集には「新古今集」以下に一一四首入集。なお、公経詠と伝えるものに『鷹百首』(群書類従・鷹所収)がある。[後藤重郎]

西園寺実氏 さいおんじみちぢ 鎌倉時代の歌人。

常盤井入道相国。法名、実空。藤原氏公季流。公経の一男。母は一条能保の女全子。女に大宮院姞子(後嵯峨后、後深草・龜山二代国母)と東一条院公子(後深草后)とがいる。文永六年(三二六)六月七日没、七十六歳。【事蹟】土御門天皇以来六代に歴任、嘉禎二年(三三三)従一位、寛元四年(二四六)太政大臣、天皇の外祖父となり、文応元年(二六)六十七歳で出家。後鳥羽院・順徳院歌壇、後嵯峨院歌壇において約五十年間におたり活動し、藤原定家の「上足の門弟」(井蛙抄・卷六雑談)といわれ、反御子左(みまごひだり)派に批判されていた藤原為家を支持する。出詠した主要な和歌行事は、建保三年(三三

『四十五番歌合』、同四年『百番歌合』、同五年『右大臣家歌合』、同六年『追助法親王家五十首和歌』、承久元年(三三三)『内裏百番歌合』、貞永元年(三三三)『洞院撰政家百首』、宝治元年(三四七)『百三十番歌合』、同二年『宝治御百首』、弘長元年(二六二)『弘長百首』など。『弘長百首』については「歌ごとにおほやけしく、長高くうるはしき体(井蛙抄・巻六雑談)と称揚された。『新勅撰集』以下の勅撰集に二四四首入集する。(国二四一)三九

【参考文献】千葉寛『西園寺実氏年譜』(『日本文学(立教大学)』昭和51年7月)。(家郷隆文)

西園寺実兼

鎌倉時代の歌人。正しくは「さわかめ」。法名、空性。後西園寺入道太政大臣。藤原氏公季流。父は太政大臣公相。母は大外記中原師朝の女。建長元年(二五五)生。正応四年(三二九)太政大臣、翌五年辞退、正安元年(二九二)出家。元亨二年(三三三)九月十日没、七十四歳。【事蹟】伏見院の東宮時代から信任厚く、中宮・水福門院鐔子の父、また昭訓門院(龜山院后)・後京極院(後醍醐院后)の父でもある。大覚寺・持明院両統迭立期に、持明院方の政治家、関東申次として権勢をふるった。また、永福門院と共に京極派の主要歌人として活躍、『嘉元仙洞御百首』『文保御百首』などの作者となる。『続拾遺集』以下、二条・京極両派の勅撰集に二〇八首、『夫木和歌抄』に十九首入集。自筆の『詠百首応制和歌』(尊経閣文庫蔵)、『弘安百首』の応制和歌、『西園寺実兼歌草』(詠十首和歌)(宮内庁書陵部蔵)がある。家集『実兼公集』(桂宮本叢書8、私家集大成・中世Ⅲ所収)は雑歌四十二首のみで、残欠本と見られる。な

お、後深草院二条の愛人として『たはずがたり』に「雪の曙」の名で登場する。(国二四九)三三三

【参考文献】橋本不美男『兼兼評師等を含む和歌資料-西園寺実兼をめぐって』(『語文』日本大学)昭和39年3月。

齋諸俗談

五巻五冊。随筆。大脚東華編著。宝曆八年(二六六)江戸大坂屋伝兵衛・太田庄右衛門刊。著者の伝は未詳。【内容】和漢の奇談・怪異談を集めたもの。自序に、「梁呉筠所著齋諸記者、載怪異書也。蓋齋諸者、元依莊子寓言也。…今也此書者、和漢史伝之中、涉獵其怪異者、集之而名以齋諸俗談」とある。巻一には、天象や神交の不思議を中心に三十三

条。巻二には、高僧の奇跡、寺社の縁起、諸芸の達人の奇跡、双頭・半男女等の異相人の話などを中心に三十三条。巻三には、異人の国、医療の奇跡、不思議な道具類などを中心に四十五条。巻四には、各地の伝説、石や木に関する奇談を中心に四十八

条。巻五には、動物に関する奇異談四十六

条を収めている。引用する書目は、『搜神記』『太平広記』『和漢三才図会』『五雜俎』などが多く、また、典拠を示さず著者の見聞という体裁のものも多い。【諸本】天明七年(一七九七)の重版がある。【翻刻】日本随筆大成新版1期19(旧版1期10)。

〔長尾高明〕

西海余滴集

一冊。芸能。平曲の楽書。自偶(か)著。寛永九年(一三三三)正月將軍徳川秀忠死去から遠くない頃の成立とも言うが、未詳。【内容】芸道論にも及び、『当道要抄』の書名が見られるので、こ

れを継承して更に充実したものであろう。道の廃絶をおそれ師説を残すものだとする序文に続き、まず稽古条々とも言うべき形で、『平家物語』を知ること、稽古のあり方とその歴史、心構え、曲節とその語り口を説く。ついで各論とも言うべき条々を問答

体で記す。すなわち、演奏にはその場を考慮すべきことを言い、発声法、師を尊ぶべきこと、日常の心構え、『平家物語』の曲の分類とそれぞれを語る上での心構え、琵琶の奏法、行事の種類や場に応じてふさわしい曲目を選ぶべきことを説く。整理と体系化がなされていず、叙述に重複も見られるが、それだけに芸道論として具体的である。【著者】前田流から見た波多野流の行き過ぎに對する批判が見られるので、自偶は前田流に属する人物であろう。一方、流師堂派高山誕一の門人で、子に長柄(か)・検校能一(か)があり、小寺(か)・温一(か)や前田九一(か)もされるが未詳。【諸本】武田祐吉旧蔵本(焼失)、富倉徳次郎蔵本(同上本写)のみ。【翻刻】古典文庫。(山下宏明)

【参考文献】武田祐吉『平曲に関する芸術論の書』(『碧落』昭和21年9月)。○渥美かをる『平家物語の基礎的研究』昭和37年。○富倉徳次郎『平家物語研究』昭和39年。

西鶴

井原(か)西鶴

西鶴大矢数

五冊。俳諧。井原西鶴作。兀々子鬼翁序。自跋。延宝九年(一七三三)四月、大阪深江屋太郎兵衛刊。ただし伝本はすべて写本。【内容】延宝八年五月七日、大阪生玉社の南坊に数千人の聴衆を集めて、西鶴が興行した独吟一日四千句。

百韻にして四十巻は、すべて兼日の八吟表八句に執筆(か)の句をはさんで西鶴が詠みつぐ形をとっている。巻頭の一巻「天下矢数二度の大願四千句也」と西鶴が発句を詠み、「百六十まい五月雨の雲 梶山保友」郭公八わりましの名を上て(西山梅翁)宗因(一)と脇第三が継がれたほかは、すべて西鶴が脇をつけている。本書はこの四千句に、当日用いられたなかった「第四十一」から「第七十七」までの表八句六十七を付載する。【成立事情】大矢数興行の直接的動機が記録の更新にあったことは、延宝五年興行の千六百句(『大句数』)が、紀子の千八百句(『大矢数千八百韻』)、三千風(か)の二千八百句(『仙台大矢数』)によって破られたことから明らかであるが、なお惟中・高政ら同門のライバルへの対抗意識や、この年激化した新旧両派の確執抗争に断を下したい意志もはたらいっていたかと思われる。自跋に、当時流行の俳風を「抜脱(か)こゝろ行の付かたとして、其座に一人も聞えず、我計うなづきて、一句く講釈、大笑ひより外なし」と批判し、「惣而(か)此みちさかんになり、東西南北に弘る事、自由にもとづく俳諧の姿を我任はじめし己来(か)也」と豪語する。しかし本書の風体は旧態依然として新しみに欠け、西鶴の本領がむしろ速吟そのものの中に俳諧の本質を追及するにあつたことを示唆する。【意義】四千句には、断片的な現実の種々相が昇華の状態で拡散的に投げ出されている。跋に「此後大矢数のぞみの人あらば此掟を守るべし」という「掟」の詳細は不明であるが、本書に「大矢数役人」として指合(か)・脇座・執筆・執筆番練(か)・白幣・紅幣・銀幣・金幣・懐紙番練・目付木(か)・線香見・割帳付・懐

れを継承して更に充実したものであろう。道の廃絶をおそれ師説を残すものだとする序文に続き、まず稽古条々とも言うべき形で、『平家物語』を知ること、稽古のあり方とその歴史、心構え、曲節とその語り口を説く。ついで各論とも言うべき条々を問答

体で記す。すなわち、演奏にはその場を考慮すべきことを言い、発声法、師を尊ぶべきこと、日常の心構え、『平家物語』の曲の分類とそれぞれを語る上での心構え、琵琶の奏法、行事の種類や場に応じてふさわしい曲目を選ぶべきことを説く。整理と体系化がなされていず、叙述に重複も見られるが、それだけに芸道論として具体的である。【著者】前田流から見た波多野流の行き過ぎに對する批判が見られるので、自偶は前田流に属する人物であろう。一方、流師堂派高山誕一の門人で、子に長柄(か)・検校能一(か)があり、小寺(か)・温一(か)や前田九一(か)もされるが未詳。【諸本】武田祐吉旧蔵本(焼失)、富倉徳次郎蔵本(同上本写)のみ。【翻刻】古典文庫。(山下宏明)

【参考文献】武田祐吉『平曲に関する芸術論の書』(『碧落』昭和21年9月)。○渥美かをる『平家物語の基礎的研究』昭和37年。○富倉徳次郎『平家物語研究』昭和39年。

西鶴

井原(か)西鶴

西鶴大矢数

五冊。俳諧。井原西鶴作。兀々子鬼翁序。自跋。延宝九年(一七三三)四月、大阪深江屋太郎兵衛刊。ただし伝本はすべて写本。【内容】延宝八年五月七日、大阪生玉社の南坊に数千人の聴衆を集めて、西鶴が興行した独吟一日四千句。

百韻にして四十巻は、すべて兼日の八吟表八句に執筆(か)の句をはさんで西鶴が詠みつぐ形をとっている。巻頭の一巻「天下矢数二度の大願四千句也」と西鶴が発句を詠み、「百六十まい五月雨の雲 梶山保友」郭公八わりましの名を上て(西山梅翁)宗因(一)と脇第三が継がれたほかは、すべて西鶴が脇をつけている。本書はこの四千句に、当日用いられたなかった「第四十一」から「第七十七」までの表八句六十七を付載する。【成立事情】大矢数興行の直接的動機が記録の更新にあったことは、延宝五年興行の千六百句(『大句数』)が、紀子の千八百句(『大矢数千八百韻』)、三千風(か)の二千八百句(『仙台大矢数』)によって破られたことから明らかであるが、なお惟中・高政ら同門のライバルへの対抗意識や、この年激化した新旧両派の確執抗争に断を下したい意志もはたらいっていたかと思われる。自跋に、当時流行の俳風を「抜脱(か)こゝろ行の付かたとして、其座に一人も聞えず、我計うなづきて、一句く講釈、大笑ひより外なし」と批判し、「惣而(か)此みちさかんになり、東西南北に弘る事、自由にもとづく俳諧の姿を我任はじめし己来(か)也」と豪語する。しかし本書の風体は旧態依然として新しみに欠け、西鶴の本領がむしろ速吟そのものの中に俳諧の本質を追及するにあつたことを示唆する。【意義】四千句には、断片的な現実の種々相が昇華の状態で拡散的に投げ出されている。跋に「此後大矢数のぞみの人あらば此掟を守るべし」という「掟」の詳細は不明であるが、本書に「大矢数役人」として指合(か)・脇座・執筆・執筆番練(か)・白幣・紅幣・銀幣・金幣・懐紙番練・目付木(か)・線香見・割帳付・懐

【参考文献】武田祐吉『平曲に関する芸術論の書』(『碧落』昭和21年9月)。○渥美かをる『平家物語の基礎的研究』昭和37年。○富倉徳次郎『平家物語研究』昭和39年。

西鶴

井原(か)西鶴

西鶴大矢数

五冊。俳諧。井原西鶴作。兀々子鬼翁序。自跋。延宝九年(一七三三)四月、大阪深江屋太郎兵衛刊。ただし伝本はすべて写本。【内容】延宝八年五月七日、大阪生玉社の南坊に数千人の聴衆を集めて、西鶴が興行した独吟一日四千句。

百韻にして四十巻は、すべて兼日の八吟表八句に執筆(か)の句をはさんで西鶴が詠みつぐ形をとっている。巻頭の一巻「天下矢数二度の大願四千句也」と西鶴が発句を詠み、「百六十まい五月雨の雲 梶山保友」郭公八わりましの名を上て(西山梅翁)宗因(一)と脇第三が継がれたほかは、すべて西鶴が脇をつけている。本書はこの四千句に、当日用いられたなかった「第四十一」から「第七十七」までの表八句六十七を付載する。【成立事情】大矢数興行の直接的動機が記録の更新にあったことは、延宝五年興行の千六百句(『大句数』)が、紀子の千八百句(『大矢数千八百韻』)、三千風(か)の二千八百句(『仙台大矢数』)によって破られたことから明らかであるが、なお惟中・高政ら同門のライバルへの対抗意識や、この年激化した新旧両派の確執抗争に断を下したい意志もはたらいっていたかと思われる。自跋に、当時流行の俳風を「抜脱(か)こゝろ行の付かたとして、其座に一人も聞えず、我計うなづきて、一句く講釈、大笑ひより外なし」と批判し、「惣而(か)此みちさかんになり、東西南北に弘る事、自由にもとづく俳諧の姿を我任はじめし己来(か)也」と豪語する。しかし本書の風体は旧態依然として新しみに欠け、西鶴の本領がむしろ速吟そのものの中に俳諧の本質を追及するにあつたことを示唆する。【意義】四千句には、断片的な現実の種々相が昇華の状態で拡散的に投げ出されている。跋に「此後大矢数のぞみの人あらば此掟を守るべし」という「掟」の詳細は不明であるが、本書に「大矢数役人」として指合(か)・脇座・執筆・執筆番練(か)・白幣・紅幣・銀幣・金幣・懐紙番練・目付木(か)・線香見・割帳付・懐

【参考文献】武田祐吉『平曲に関する芸術論の書』(『碧落』昭和21年9月)。○渥美かをる『平家物語の基礎的研究』昭和37年。○富倉徳次郎『平家物語研究』昭和39年。

西鶴

井原(か)西鶴

西鶴大矢数

五冊。俳諧。井原西鶴作。兀々子鬼翁序。自跋。延宝九年(一七三三)四月、大阪深江屋太郎兵衛刊。ただし伝本はすべて写本。【内容】延宝八年五月七日、大阪生玉社の南坊に数千人の聴衆を集めて、西鶴が興行した独吟一日四千句。

紙台・懐紙掛役・御影(ひさ)支配・代参・医師・後座の合計十八役五十五人の名を記すこと、「諸(しよ)吟(ぎん)にして作法すこしもる、事なし(跋)とあることなどから、おおよそは知られる。右にいう幣は千句成就ごとに神前に奉ぜられたもので、京三十三間堂の通し矢競技に模したものであろう。貞享元年(一六四)六月五日の二万三千五百句独吟では、更に常見(句数改め)・座堅め(場内整理係)が新たに設けられている。大矢数興行後、西鶴は下里勘州(知足)に書簡を送り、「今度西山宗因師より日本第一前代之俳諧の催と世上に申わたし、さてくめいぼく此度也」と自賛したが、世上の俳諧はようやく曲り角にさしかかっていた。【諸本】いま笠亭仙果写の東京大学西竹文庫本によつたが、他に雅楽堂旧蔵本・東大図書館蔵、仙果本の転写と思われる三面子旧蔵本がある。【複製】近世文学資料類従・古俳諧編31(田中善信解説)。【翻刻】新選

給人西鶴全集・俳諧篇2。日本俳書大系・談林俳諧集。『古典研究』(昭和15年8月別冊付録)。定本西鶴全集11下(野間光辰解説)。

【参考文献】暉峻康隆『西鶴―評論と研究―上』昭和23年。○前田金五郎『大矢数語彙考証』『西鶴研究』2・3、昭和24年10月・25年10月。○同『大矢数題材管見』(一)、『國語国文』昭和25年10月・12月、26年11月。○同談林の作品、西鶴大矢数鑑賞(『国文学解釈と鑑賞』昭和30年5月。○同『西鶴大矢数用語管見』(『国語』3の5、昭和30年7月)。○吉田幸一『西鶴大矢数と源氏物語』(『西鶴研究』5、昭和27年10月)。○山下一海『大矢数俳諧の展開』(『西鶴物語』昭和53年)。○乾裕幸『西鶴・自由の俳諧―大矢数跋文を読む』(『俳諧師西鶴』昭和54年)。

西鶴置土産(さいかくぢりょう) 五巻五冊。浮世草子。井原西鶴作。挿画は時絵師源三郎風。元禄六年(一六九)冬、大阪八尾甚左衛門・江戸万屋清兵衛・京都田中庄兵衛刊。【成立事情】西鶴没後刊行の第一遺稿集で、書肆の跋文には最後の病中の執筆にかかるといふ。全編十五章の短編集であるが、各章間の完成度の差が大きく、文章の乱れも見られ、巻三の二から巻四の二まで西鶴自筆の断り書を付した部分(金井寅之助によれば自筆の謄写)以外の版下書は三手(金井説)が混在し、版式の不統一など疑問はあるが、今日では全編西鶴作、北条团水の編集と最小限加筆を認める説が有力。編集時に二十章分の残存原稿の一部を西鶴俗つれ(く)にまわして編成を改めたとか、文章の乱れは原稿の脱落を不注意に補綴して起つたとかする説がある。自筆と称する部分を擬筆とする説(島田勇雄)など、異論もある。また、『元禄大平記』にいう「好色浮世躰」を本書にあてる説(谷脇理史)がある。

【内容】巻頭に西鶴晩年の肖像、「浮世の月見過しにけり末二年」の辞世、「元禄六年八月十日五十二才」と没年月日・享年の記載(西鶴の年齢を知り得る最早期の記載)、北条团水・榎本才磨ら七人の追善発句があり、元禄六年冬の、西鶴書捨ての反古中より出たのを書林に与えた旨の团水序、西鶴序(版下別筆、署名・印記は「世間胸算用」序より写す)がある。本文は、西鶴序に「色道のうちはもりなれる行末あつめて」大全としたとしように、色遊びに徹底して没落した男たちに関する十五話から成る。巻一の「女郎買に灯し油を買う錢もなくした男が、全盛時の見栄が捨てられず、夜半に釜を売って友人に酒を振舞い、招待を受け

着替えと見せてのれんを包んで行き、ばれてより世を捨てた話。巻二の「色遊びに零落して僅かな手代の仕送りに暮す堺の島長が、愛宕詣りの途中の宿で女郎上りの女と戯れ有金残らず与えて昼飯も食わずに帰るといふ業深い好色。巻三の二の、金魚の餌のぼうふら取りにまで落ちぶれた月夜の利左衛門が、昔の色友達に誇りを失わなかつた話など、諦観・矜持・意地・愚劣さまざまな零落大尽の姿を透徹した目で描き、そこに滅びの美と人生の真実を盛上げている。完成度の低い章も多いが、それを超えて、西鶴晩年の心境を反映した、生涯の縮括りにふさわしい作として、近時再評価されている。【諸本】当時の『書籍目録』の記載によつて、八尾ら三書肆刊本以前に今日未確認の富士屋長兵衛(また藤屋長太郎とも)刊本が存したとする説と、右記載を誤記として否定する説(吉田幸一)とがある。右刊本以後、序の年記を削つた本、跋も除き本文末に手を加えた京都青山為兵衛刊本、享保一宝曆(一七二一―一七五〇)間の大阪吉文字屋市兵衛刊本(伝存本不明)がある。江戸では用字を改め挿絵を菱川風に改めて『西鶴彼岸桜』(岩崎文庫貴重本叢刊『浮世草子』に影印)と改題した本が元禄七年二月に志村孫七により刊行され、序跋等を新挿して志村が元禄十一年正月に更に改題した『朝くれなゐ』、巻一巻首本文改竄、章題を改め、挿画見開き分を奥村政信筆に改め、宝永五年(一七二〇)正月江戸辻五兵衛・小谷茂右衛門刊の『風流門出加増蔵』がある。【複製】古典文庫。『西鶴置土産影印本』(金井寅之助、昭和45年)。近世文学資料類従・西鶴編15(金井寅之助解説)。【翻刻】日本名著全集『西鶴名作集・下』。定本西鶴全集8。

日本古典文学全集・井原西鶴集(三)。対訳西鶴全集15。 [長谷川強]

【参考文献】暉峻康隆『西鶴―評論と研究―上下』昭和23年。○野間光辰『西鶴年譜考証』昭和27年。○金井寅之助『西鶴置土産の版下』(『ブリア』23、昭和37年10月)。○同『西鶴置土産』(『国文学解釈と鑑賞』昭和44年10月)。○同『西鶴置土産の版下、再び』(大谷篤蔵編『近世大阪芸文叢談』昭和48年)。○天理図書館『西鶴』昭和40年。○島田勇雄『西鶴置土産の自筆版下をめぐって』(『紀要(神戸大学文学部)』昭和47年1月)。○谷脇理史『西鶴研究序説』昭和56年。

西鶴織留(さいかくぢりょう) 六巻六冊。浮世草子。井原西鶴作。挿画は時絵師源三郎風。元禄七年(一六九)三月、京都上村平左衛門・大阪馬屋庄兵衛・江戸万屋清兵衛刊。『西鶴置土産』に次ぐ西鶴の第二遺稿集。【成立事情】元禄七年刊記の本に二種あり、(一)は「元禄版原刻本」と呼ばれ、西鶴序(「世の人心」のために用意のもの)を有し、副題を全巻「世の人心」とするもの、(二)は「元禄版通行本」と呼ばれ、北条团水序を加え、副題を巻一・二は「本朝町人鑑」、巻三以下を「世の人心」とするもの。(二)の团水序(元禄七年四月)には、西鶴は貞享五年(一六八)正月刊の「日本永代蔵」に次いで「本朝町人鑑」「世の人心」を述作、三部作とする計画であったが、後二作は未完に終わったので、併せて一部としたのが本書であるという。この言から、「永代蔵」に予告された「甚忍記」計画を変更したのが「本朝町人鑑」「世の人心」であったと考えられるが、三部作の計画は西鶴の意図でないとする説、「甚忍記」計画は本作及び「西鶴俗つれ(く)」の一部残るが、多くは貞享五年・元禄二年刊の諸作に分散吸収されたとする説もある。執筆時期

西鶴編15(金井寅之助解説)。【翻刻】日本名著全集『西鶴名作集・下』。定本西鶴全集8。



は元禄元年(貞享五年九月末改元冬より同三、四年頃)にわたるとみられるが、一部拙作部分を指摘して編集時加筆を考える説がある。また伊藤梅宇の『目聞談義』巻六に本書巻三の二の文が引用されているが異同があり、そこから稿本による流布説がある。【内容】全二十三章、「町人鑑」に当る巻一、二が九章、「世の人心」に当る巻三―六は十四章。前者は町人の鑑戒に資する題下に、町人の商売・家政にもとづく盛衰を描く。巻一の「色遊び」中も商魂を失わぬ男の出世は『永代蔵』の世界に近いが、資本のない者は働いても金持に奉仕するだけ(巻一の二)、贅沢の世となり奉公人や妻の不満に倒れる家(巻一の三)という時代で、慈悲(巻二の二)・信心(巻二の二)が思わぬ運をつかむ、運がないと小才があってもうだつが上らぬ(巻一の四)と、『永代蔵』に比べて姿勢は消極的で、燃焼不足の章が多い。後者はさまざまな身分・職業の人心の諸相を描くが、小説としてのまとまりのない随想的な章が多い。巻四の一・巻六の一など微妙な心のゆれが悲劇を生む話としてまとまりがあるが、世間智の談義に墮した章も多く、巻四の二の医者と家族の病、巻四の三の不具の娘、巻六の二の三子を残し妻に死なれた男など、西鶴自身の身辺の感慨と見られる章もある。巻三の三は『永代蔵』と同材の話ながら拙く、同書の破棄原稿の混入も考えられる。「町人鑑」の存在、及び「世の人心」に中流以下の町人のあがきを伝える章や「世間胸算用」と題材・描写に通じる章のあることから、本書は『永代蔵』から『胸算用』への過渡相を示すと考えられる。しかし前述梅宇の引用に賞賛の言があることは、当時の評価を考えなおす鍵になる

り。【諸本】宝水六年(七三)正月江戸万屋清兵衛・大阪油屋平右衛門・本屋権兵衛版、正徳二年(七三)五月大阪岩国屋徳兵衛・大塚屋権兵衛・油屋与兵衛版があり、本文の一部にそれぞれ覆刻箇所がある。また享保十五年(二五〇)以前刊の大阪吉文字屋市兵衛求版本がある。【複製】岩崎文庫貴重本叢刊『浮世草子』I。古典文庫。近世文学資料類従・西鶴編16。【翻刻】日本名著全集『西鶴名作集』下。定本西鶴全集7。日本古典文学大系『西鶴集』下。角川文庫。対訳西鶴全集14。【参考文献】暉峻康隆『西鶴一評論と研究』上下(昭和23・25年)。○同『西鶴新論』昭和56年。○野間光辰『西鶴年譜考証』昭和27年。○同『西鶴新考』昭和56年。○木村三四吉『西鶴織留諸版考』『ヒリア』28、昭和39年8月。○天理図書館『西鶴』昭和40年。○宗政五十緒『西鶴の研究』昭和44年。○谷協理史『西鶴研究序説』昭和56年。○同『西鶴研究論攷』昭和56年。【西鶴五百韻】一冊。俳諧。\*原西鶴編。唯一の伝本(国会図書館蔵)に、原題簽によつたとみられる「西鶴五百韻」の後補題簽あり。内題なし。延宝七年(二六九)三月、大阪深江屋太郎兵衛刊。【内容】山中西六こと酒造家鴻池善右衛門に招かれ、大阪今橋二丁目の西六亭で興行された西鶴・山本西六・水田西吟・山本西友・松井西花の五吟百韻五巻を収める。巻頭の西鶴発句「曲水の水のみなみかみや鴻豊池」は、亭主西六への挨拶である。五名連署の序文西鶴起草であろう(「弥生の六日七日八日にすらし」と此五百韻)とあり、三日間の興行であったことがわかる。また、「上々吉清水の流れ、上戸も下戸もなべてすくべき酒ぶ

り、諸国の人にや／＼いやとはいはせじ、あまふ成ともからふ成ともお相手になべし」の文辭に西鶴の自信のほどを読みとるべきであろう。【複製】古典文庫。『西鶴研究』3(昭和25年10月)。近世文学資料類従・古俳諧編30(田中善信解説)。【翻刻】新選絵入西鶴全集(俳諧篇1。定本西鶴全集11上)暉峻康隆解説。(乾 裕幸)西鶴諸国ばなし(こくごばなし) 五巻五冊。浮世草子。井原西鶴作画。序文があるが無署名。内題「天下馬」、肩部に「近年諸国咄」。貞享二年(二六五)正月、大阪池田屋三良右衛門刊。現存本は三種に分け得るがすべて同版。【刊行】水谷不倒の『浮世草子西鶴本』は、序文に「難波西鶴」の署名がある本を見たが、現在確認できない。西鶴生存中に刊行された浮世草子で書名に「西鶴」を冠するは本書のみ。三つの題を有するの本書のみで、かつ柱刻に「大」とある事から、本書は当初「天下馬」と外題して出されるはずのところを、事情あって(本書と同年月の刊記を有する『宗祇諸国物語』と関係があるとされている)、急遽、外題のみに西鶴を冠して出版されたものと考えられている。なお、右の事由に加えて、柱刻が四通りに分かれる事などから、現存本は改題再版本の可能性ありとする説もある。速断はゆるされぬが、版下は読点の用い方(・と。)を加えればなお細分され、再版時にそれほど大幅な修補をしたのか、後述『書籍目録』の記載(『西鶴はなし』)を併せ考えると、やや疑問とするところもある。【内容】「世間の広き事、国々を見めぐりてはなしの種をもとめぬ」(序)とあること

く、諸国の怪異奇談集。各巻七章、全三十五編。構想上「宇治拾遺物語」(特に序文)を意識することは明瞭だが、原題と考えられる「天下馬」には己の集めた咄には皆が下馬するという自負がこめられており、むしろ「宇治拾遺」に対抗したと言うべきだろう。また他に、本書の構想には「伽婢子(あまごり)」や「噺物語(はなし)」が介在しているとの指摘もある。なお、「近年諸国咄」の「近年」は古きに対する近年、徳元和備武以後の近世初期を指す。因みに本書で年時を明示する咄は五編あり、いずれも元和(二五五)から慶安(二六五)までである。「熊野の奥には湯の中にひれふる魚有」以下、序文は諸国の奇異珍物へ強い好奇を示しながら、「都の嵯峨に四十一迄大振袖の女あり。是をおもふに人はげけもの、世にない物はなし」と結ぶ。奇事を扱いつつながら、結語のような認識で対処したところに、当時の怪異小説とは一線を画する本書の独自性があると言えよう。咄の分布状況は、奥州一、常陸一、江戸四、相模二、駿河一、信濃三、飛騨一、若狭一、京三、山城二、大阪二、摂津一、和泉一、河内二、大和四、紀伊三、但馬一、播磨一、筑前一。三都と畿内を過半を越すのはその地域に対する作者の親疎の度合や読者圏を考えてのことであろう。同時に地方へも十分目が配られている。また、地方に奇談が多く、江戸で武士を扱った(四編中三編)、芸能咄を京阪近辺(伏見奈良等)に置くなど細かい配慮をうかがうことができる。話柄で言えば、変化妖怪異類異形等の奇談が多いのは当然だが(約二十編)、一方、巻一の三、巻四の二、巻五の四のごとく現実味の濃い咄も多く(約十編)、かつ奇談にしても笑話的要素(巻一の

六、卷二の七等)や人間臭の強いものがあつて、如上の事が本書を他の諸国咄と趣を異ならせる一因となつてゐる。

【方法】本書に収まる三十五編はその原拠(中世説話集・仮名草子・地誌・雑纂等。また、伝説・事件等も含む)がほとんど判明しており、作者の創作方法を知るにきわめて有効である。ただ、その利用法は決して単純でなく、一編に二つ以上を用いる場合も多く、それらは奇抜な連想や着想によつて巧みに配置され、しかも究極には、作者独自の解釈や新たな咄が加えられて面目を一新する。観点を交えて言えば、一方に世俗周知の素材(海尊伝説や二月堂伝説を用いていったん読者を共通の基盤に参与させておき、次に自己の世界に導いていく、という方法である。右が説話文学の方法を享けるものであることは十分に認めねばならぬが、と同時に、咄の方法の導入などにそれだけでは括りきれぬ独自の面があることも注目せねばなるまい。本書には笑話と称してさしつかえない咄が少なくも四、五編はあり、部分的にこの気味を持つものを加えれば、その数は倍加する。現に、元禄五年(六三三)刊の『伝説書籍目録』は「物語類」と「咄の本」の双方に本書(『西鶴はなし』)を出し、当時すでにこの作品が咄本とも受け取られていたことを証している。在来の諸国咄を咄の方法でものしただけで、本書の方法的新しさがあつたと言えよう。

【特徴】根元的に言えば、西鶴という作家は、近世期に最も著しく擡頭した町人の社会に生きて、序文にもあるようにあらゆるものを現世的・相対的に捉えようとする固有の眼を持つていた。神仏をも相対化する眼で、伝統的な説話や伝説を新しく見直し

解釈して呈示したところに、本書の群を抜く面白さが産み出されたと言えよう。最後に付言すれば、「はなし」が西鶴小説の基本をなすことは大方の認めるところであり、その意味で本書は西鶴小説作法の原初的形態をも示している。

【複製】稀書複製会叢書・西鶴期。古典文庫。【翻刻】日本名著全集・西鶴名作集・上。日本古典全書・井原西鶴集(四)。定本西鶴全集3。日本古典文学全集・井原西鶴集(二)。

【参考文献】前田金五郎『西鶴題材小考』(『語文』7、昭和27年11月)。○江本裕『西鶴諸國はなし―説話的発想について』(『近世文学』8、昭和37年11月)。○堤精二『近年諸国咄』の成立過程(『近世小説・研究と資料』昭和38年)。○金井寅之助『忍び屋の長哥』の背景(『文林』1、昭和41年12月)。○井上敏幸『紫女の素材と方法』(『近世文学』22、昭和48年7月)。○岸得蔵『西鶴諸國はなし』考(『海尊伝説と西鶴諸國はなし』(『仮名草子と西鶴』昭和49年)。○宗政五十緒『西鶴諸國はなし』の成立(野間光辰編『西鶴論叢』昭和50年)。○谷脇理史『西鶴小説の説話的基盤』(大谷篤蔵編『近世文学論叢』昭和53年)。

西鶴俗つれぐさいかくつれぐ 五巻五冊。

浮世草子。井原西鶴作。挿画は時給師源三郎風。元禄八年(六五五)正月、大阪八尾甚左衛門・京都田中庄兵衛刊。西鶴の第三遺稿集。【成立事情】「藤房」印の書林序につづく北条団水の序に、西鶴没時」とりまぎれたるさうしの中よりこの比見さらえて書林何某にゆづる」という。他の遺稿集『西鶴置土産』『西鶴織留』などはそれぞれ統一したテーマを持つのに、本書にはそれがなく雑然としており、版下書は四手(金井寅之助説。そのうち西鶴自筆らしいものについ

ては中村幸彦は擬筆と謄写説がまじり、行数、章題の付け方も統一を欠き、各編の間に執筆姿勢の差、完成度の高下がある。既に『置土産』に予告があり、『置土産』編入計画からはずしたものと、統一したテーマで一書を編成できない原稿群(その一部に『日本水代蔵』に予告された『甚忍記』の原稿を考える説がある)を合せ、団水の補筆(中世説話集に取材の章、漢語の多い生硬な部分、団水筆また非西鶴筆とする中村幸彦説がある)編集によつて成つた書と考えられる。【内容】書林序に「彼吉田の題号をかすめとりて俗つれぐと名づくる」といひ、序の間に兼好を思わす隠者西鶴像があり、団水序にも「徒然草」に触れる。本書が酒と色に関する話を多く集めるところから付けられた題名と考えられる。また五代將軍綱吉の酒嫌いと団水の大酒癖を団水の編集計画と関連ありとする説がある。十八章の短編(巻四の二一四は一連の話)は内容の上から、(一)飲酒の否定的描写(巻一の二一四、巻三の二一四)、(二)愛欲の否定的描写(巻一の二一、二、巻五の一三三)、(三)風俗面譜的構想を有する中編の未定稿(巻四の二一四)、(四)諸国咄系統(巻二の三、巻三の一、巻四の一)に分類(暉峻康隆)できる。このうち(二)の諸章は置土産に入れるべくして残されたと考えられる話で、自筆らしい(また擬筆・謄写)といわれるものも多くを含み、話の出来がよく、けちな親仁が新町富士屋の吉田の美形を見て浮かれ、落した細銀から息子の大尽遊びがばれる巻二の一が本書を代表する章である。(一)では、酒癖の悪い男が酔いの上で女房に心中立てに髪を切らせ、覚めて後悔する巻三の四が佳編である。巻三の三は『宝物集』七巻本に見

える勤操の話によつており、団水補作の疑いのある章である。(一)のグループではなお巻一の一、巻一の二について西鶴作を疑問とする見解があり、この説を肯定すれば巻頭の章であるので編集事情に不審が残る。(三)は、都の嵯峨辺に隠れ住む金持が妻とすべき美人を探し求めさせ、その報告の席で理想の美女を論ずる話が三章にわたるが、形式の不整と内容の未完成から、残存断片原稿を寄せ集めて首尾をつくろい連結した感がある。(四)は貞女・孝女説話とみて、『甚忍記』計画のために用意された原稿と考えられる説(宗政五十緒)もある。(一)―(四)の各グループは執筆時期を異にすると考えられ、元来一書を成さぬ未完原稿であつたがゆえに雑然とし、拙作も多く、団水補筆もあつたのであろう。低調であるがなお問題の多い作である。【諸本】京都青山為兵衛刊の後印本がある。【複製】岩崎文庫貴重本叢刊『浮世草子』。古典文庫。近世文学資料類『西鶴全集』17。【翻刻】日本名著全集『西鶴名作集』下。定本西鶴全集8。対訳西鶴全集16。〔長谷川強〕

【参考文献】暉峻康隆『西鶴―評論と研究』上下(昭和23・25年)。○野間光辰『西鶴年譜考証』昭和27年。○中村幸彦『西鶴俗つれぐれの書誌的考察』(『ピリア』28、昭和39年8月)。○天理図書館『西鶴』昭和40年。○宗政五十緒『西鶴の研究』昭和44年。○谷脇理史『西鶴研究序説』昭和56年。

西鶴伝授車さいかくでんじゆ 五巻五冊。浮世

草子。天狗堂転蓬作。正徳六年(七二五)二月、京都村上宗吉刊。【梗概】西鶴は浮世草子を作つた罪で地獄の責苦に逢うところを、許されて狂言作者として閻魔大王に仕えてゐる。ある時地獄の金持衆に不景氣救

濟のためと口説かれて鑄錢術を伝授したところ、数万の獄卒の働きて忽ち錢が普及し、更に錢座を開いた金持衆が私腹を肥やして色里で大尺振りを發揮するに至った。また彼等の取り持った美女が西鶴の口利きで大王の侍女となり、浮舟の名を賜わって忽ち寵愛をほしいままにした。西鶴は更に彼等から狂言を仕組むべく命ぜられ、先到大王に目通りさせた片岡仁左衛門・萩野長太夫に諮って死人の骨から役者を作り、座本片岡、太夫萩野、作者西鶴で二月初めに開幕したところ、初めての見物に鬼共がよだれを流し、僧侶達が役者に狂い出した。評判を聞いて太夫萩野に恋慕した浮舟は、奥医師の指図で呉服商が葛籠に入れて運び込む萩野と密会を重ねたが、更にある日社参を口実に芝居へ赴いて萩野と会い、また、腰元と謀って仮病を使い、萩野らを祈禱の山伏に変装させて宮中に入らせる等の乱行を極めるうち、遂に事露頭及び、一類流罪となったという所で、目が覚める。

【作意・趣向】家業に厚恩ありとて絵像に祭り、常々回向している西鶴がある夜現形して語ったところをそのまま版にしたと、版行屋の軒蓬(村上)の筆名か)の自序にいう。近年の物価騰貴、相次ぐ貨幣鑄造改廃の中での鑄錢座の設立、幕政の紊乱等の一連の社会象を、特に有名な給島事件に焦点を置き、『西鶴冥途物語』等に代表される西鶴の好色物や能(安宅)等の趣も取り込んでいるが、現世と冥途の書き分けその他に未熟さが目立ち、社会諷刺としても不十分。前年十一月没の初世仁左衛門と刊行直前に没したらしい若女形水木染之助に一月刊の役者評判記『我身宝』や東西役者の近況の事

を問答させる等、芝居への関心が濃く際物の性格も著しい。【翻刻】浮世草子・終篇 浮世草紙4。 [吉江久弥]

かのご認定が必要であろう。【複製翻刻】洒落本大成2。 [中野三敏]

西郭灯笼記

一巻。洒落本。快活道人作。内題は表記の通りであるが、題簽は西郭観灯記とあり、見返しも「観灯記」とする。宝曆六年(一七五六)京都豊栄館刊。

【内容】和文の本文八丁と七言長詩三丁、発句二丁とから成る。和文は初めに島原の威容を述べ、それが所々方々に茶屋が出来たために衰微したこと、享保の末に踊戯場を夜見世となして再興を図ったがうまくいかなかったこと、次いで近年になり「地方(之)の郷約(之)枯梗やの陸賈(之)」、大坂の伯当(之)など智恵袋の底たゞき、たのものの節句より仲秋まで家々ごとに灯笼をつるして飾り山車をしくんだところ、これが大当りしてまんまと再興したこと、その有様を述べる。以下七言長詩「妓人行」観灯篇「八月十日西郊青楼観灯」の三首を連ねるが「観灯篇」の末に「丙子(宝曆六年)秋八月書于松坡館中」とあり、「八月十日」の詩の末には「君川釣徒」と署名する。次に「談儀過度戯の一興申ちらす」とあって、太夫・天神以下廊中の諸職十五を題とする発句を掲げ「風水散人」と署名する。長詩が中心で和文はその序もしくは発端と見るべきか。また文章は漢文書き下しの如くで「楚館」に「あげや」、「游郎蕩子」に「あそびぎやく」等々、随所に左訓を用いて俗解をなすのは当時流行の白話俗解風の文章であり、さすれば作者快活道人は「平安花柳録」の纂定者快活道人と同人かとも疑われるが、「花柳録」の選者松室松峽は早く延享四年(一七九三)没しており、纂定者が選者とは別人か否

の複製翻刻」洒落本大成2。 [中野三敏]

西鶴名残の友

五巻四冊。浮世草子。井原西鶴作。挿画面者不詳。元禄十二年(一六八七)四月、浪花書林(店名不詳)刊。

【成立事情】北条团水の序文に、西鶴の残した反古中より採り出した自筆の一書といい、巻頭の惣目録首にも「自筆」と断り書がある。西鶴自筆の一書としてまとまった作が没後六年も眠っていたことに疑問が持たれ、各章長短不整で、版式にも不統一の点が見られるので、従来擬作・補筆説があった。現在、全編西鶴自筆草稿が四人の謄写者により処理されたとする説(金井寅之助)、一部に西鶴の筆跡を巧みに真似る人物の手が加わるとする説(中村彦彦)、否定説(島田勇雄)があり、また、团水は編集のみで手を加えていないとする説、团水編で補筆または一部の章を補作とする説がある。章の排列は編集時改められた形跡がある。西鶴の執筆時期については元禄四年とする暉峻康隆の考証があり、刊行の遅れについては、本書はなお未完成で、团水に完成の計画があり保留したとする説(宗政五十緒)がある。【内容】五巻に二十七章の短編を収める。团水序に「諸国の雜譚例の狂言をしるせり」という。各章は諸国俳人の逸話集の形をとっており、守武・宗鑑ら有名無名九十名前後の俳人の名が出、西鶴自身が登場したり、直接の見聞と思わせる叙述の章も多い。身辺雑記的な話の他に小咄など既に流布の話題を関係のない実在の人物に結びつけたりしており、团水の言はこのような内容を指しているのである。团水はなおみづから筆を染めね

ば故人にあふこゝろばせして」という。題名はこの意をこめて彼の付したものである。西鶴自身の見聞、また西鶴の行動に關連づけられた章に、宇治川の先陣を真似て馬で渡った浪人が老婆の批判を受けた話(巻二の三)、恋の句の一句もない百韻の点をした話(巻三の六)、長命自足の乞食の話(巻四の四)などがある。先行の説話や小咄の集に見える話を、俳人の逸話、実事の見聞に託したものに、前掲巻二の三と「古老茶話」、無筆の家で年始の礼帳を絵で書留める滑稽話(巻五の三)と「鹿の巻筆」、下戸の西鶴に送られた酒樽の味は餅という話(巻四の五)と「狂歌咄」との関係が考えられ、その他前後の小咄などに類話が求められる。また西鶴が耳にした軽口咄の利用と考えられているものに、虎の髭を書き忘れて毛抜きを書きそえる話と初心の者が百韻の点を乞い高点を得たと思いがいる話(巻一の二)、田舎男が琵琶を神代の秤の箱と見ると話(巻一の二)、日和見の上手な婆の話(巻三の二)、夢想の句を不吉と気にする男に気転の付句をして喜ばせる話(巻三の二)、本妻腹の子と妾腹の子の命名の話(巻四の二)などがある。それらを実と虚とを巧みに交えて好ましい諧謔と諷刺の掌編集としており、西鶴の小説の基本的な方法(はなしの姿勢)を示す好個の作とする野間光辰の分析がある。また同時代人で対蹠的な生き方をした芭蕉に触れた巻三の四は非西鶴作説があり、巻四の四は西鶴の庵住の様を伝える。重量感に乏しく、苦心作とは思えぬが、西鶴晩年の風懐を伝えるものとして評価が高い。なお巻末に、西鶴の残した自「筆箴」と題した自筆の覚書を近日刊行するとあるが、未刊に終り、稿本も伝存しな

い。【諸本】本文細部に小異のある後印本がある。なお、現存本の前段階の刷本を想定して、それを初印とし、現存本を小異同により区別して、再印・三印・四印と分ける説(金井寅之助)がある。【複製】岩崎文庫貴重本叢刊『浮世草子I』。古典文庫。『影印本西鶴名残の友(吉田幸一、昭和46年)』。近世文学資料類従・西鶴編19。【翻刻】日本名著全集『西鶴名作集・下』。定本西鶴全集9。対訳西鶴全集16。 [長谷川強]

【参考文献】 輝峻康隆『西鶴―評論と研究―』。上野昭和23・25年。○野間光辰『西鶴年譜考証』。昭和27年。○同『西鶴新新次』。昭和56年。○中村幸彦『近世作家研究』。昭和36年。○天理図書館『西鶴』。昭和40年。○宗政五十緒『西鶴の研究』。昭和44年。○島田勇雄『西鶴本のかたち』(七)『西鶴名残の友について』(二)『研究(神戸大学文学会)』。47、昭和46年1月。○乾裕幸『西鶴名残の友の芭蕉評』(野間光辰編『西鶴論叢』。昭和50年)。

西鶴冥途物語

世草子。幻夢作。元禄十年(一六九三)京都長谷川伝兵衛刊。【梗概】二十年来執筆(5)を勤めて今年三十九歳という京都の俳諧師幻夢が、東山の花見に招かれて帰宅した途端頓死する。中有の野で幻夢は見知りの西鶴に行き遇うが、西鶴は目下地獄で雑俳の宗匠をしていると語り、その現況を披露した後、幻夢を案内して俳諧師の地獄や浄土を歴巡する。他人の作を貶めた者、盗んだ者、先輩を軽んじた者、不正を企んだ会所、好色本の作者等はそれぞれ等活・黒癩・衆合・叫喚・大叫喚の地獄に、また徒らに私腹を肥やした宗匠達は餓鬼道に苛まれていた。論争を事とした者の苦を受けている修羅道は幻夢の知人が多いからと遠慮し、次は浄土へ赴く。鳥鳴き花乱れ咲く浄土の宮

殿には人麿を中心に宗鑑・守武等大勢がいる。美景に見とれていと貞徳か立圃と思われる宗匠が現われて諄々と俳諧の奥義を説き、五色の雲に乗って去った。忽ち元の野に出た幻夢はそこで西鶴から一切の邪俳を正風体に帰せしめよと諭されて甦る。二十四時間にわたる夢幻の如き此の見聞を記録した幻夢は、難波に西鶴の故庵を訪ねて霊前に回向した後、東路さして俳諧修業に旅立った。【作意・趣向】上方俳壇の墮落と混乱を慨嘆してその批判の意を寓した作品で、西鶴作『腕久二世の物語』(元禄四年刊)の腕久の案内で大尽の地獄を巡る趣向、西鶴が地獄で前句付の選をするという朴翁撰の雑俳書『蓮の花笠』(同七年刊)発端の趣向等が利用されており、西鶴地獄巡りもの流行の濫觴とされている。【作者】誠実さを感じさせる作風であるが、作者幻夢は恐らくは貞門系で、俳諧師西鶴の崇拜者か。彼は西鶴が晩年京都で俳諧を興行した折に度々執筆を勧めたという。序文の作者泡影共々仮名で同一人物であろう。西鶴に仮託した発句その他が作中にある。【諸本】長谷川版の他に、改題本らしい『西鶴夢中独笑』(宝永年間(一七四一)刊)もあるも未見。

【翻刻】『浮世草子』終篇。徳川文芸類聚3。 [吉江久弥]

西華集

二冊。俳諧。支考編。元禄十二年(一六九六)京都井筒屋庄兵衛刊。【内容】元禄十一年初夏から秋にかけての支考の西国行脚(『曇日記』続『五論』の旅)を記念した俳諧集。乾の巻には、序文に代えて撰集意図を説いた「目録」掲げる他、摂津から筑紫に至る各地で巻いた表台(八句形式の連句)二十六とその句解、坤の巻には、

各地国別の発句集、さらに「余興」の部として芭蕉・支考の発句とその注解が収められる。【特色】支考最初の本格的な俳諧行脚の成果を示す本書の撰集法には、(1)行脚の経路に沿った各地域ごとの部立をとる、(2)表台という新形式をとり入れた、(3)表台に句解を付す、など種々斬新な工夫がみられ、句解の中には、不易流行や真草行の説、あるいは付方の法に関する解説もうかがえ、支考俳論体系の形成上からも注目される。【翻刻】『俳諧文庫』支考全集。 [堀切実]

さいき

一冊。御伽草子。版本の題簽は「さかき」。江戸時代前期までに成立か。【梗概】豊前国うだの佐伯(3)は、一族に所領を取られ、訴訟のために上京した。訴訟が捗らないため清水に参籠し、そこで美しい女房に会う。その女と結ばれた佐伯は訴訟も成り、女を迎えることを約して帰国する。三年が経ち、音沙汰がないので女が手紙を出したところ、佐伯は留守で、手紙を読んだ本妻は女の才と気だてに感心し、一計を案じて女を迎える。女を見た本妻は、このように美しい女のことを忘れる夫の不心得に呆れ、また自分に対する誠意も無いものと、愛想を尽かして出家する。それを知った女も出家、二人は同じ庵室で修行する。二人の女に捨てられ、佐伯も出家する。すべて清水観音の計らいであり、三人は往生を遂げ、弥陀・観音・勢至と現れた。【特色】男の上京を発端とする二人妻物語は、『磯崎』『高野物語』(4)、『七人比丘尼』『藍染川』等に知られる。二人妻物語は古くからあるが、所領争いの訴訟のための上京等という設定は、狂言にも見え、本

作を極めて当代的・現実的なものとしていた。前述の諸編が田舎の女の嫉妬や後妻(5)の打ちを扱うのに対し、本作では、都の女を迎え取り夫を批判する、情ある強い女としての本妻が描かれる。ここに本作の卓抜な着眼が認められる。相憎むべきはずの二人の女の出家、同室修行、往生の趣向は、『平家物語』の「祇王」の話に通う所もある。ただし本作においては、その悲劇性の追求、それに伴う悲劇的昇華としての往生の意義はほとんど忘れられてしまっている。また「物くさ太郎」と同様、妻観音としての清水観音が重要な役割を果たすこと、阿弥陀三尊の本地譚的結構を持つことが注目される。【諸本】御伽草子二十三編(刊本)の1の他、横山重蔵写本がある。【複製】『御伽草子』(市古貞次、昭和47年)。【翻刻】日本古典文学大系『御伽草子』。日本古典文学全集『御伽草子集』。 [木下資一]

西行

平安時代から鎌倉時代にかけての歌人。俗名、佐藤義清(3)憲清とも。法名は円位。また、西行・大宝房と号す。父は検非違使左衛門尉佐藤康清。母は監物源清経の女。元永元年(一一二二)誕生。文治六年(一一二〇)二月十六日没、七十三歳。

【出自】父系は藤原氏北家藤成流、倭藤太秀郷の血脈を引く武門。平泉に三代の榮耀を誇った鎮守府將軍藤原秀衡も広くは同族であるが、義清の一流はその曾祖父公清の代から上京して京武士の道を選び、歴代左衛門尉に任ぜられ、姓も佐藤と称した。代々の蓄財もあつたであろうが、とくに祖父季清の頃から紀州の田仲庄を預かって

裕福であった。母系については詳しいことはわからないが、外祖父源清経は『梁塵秘抄口伝集』や『蹴鞠口伝集』にその名が見える、今様および鞠の名手であった。

【生没】西行の年齢については『台記』永治二年(二四三)三月十五日の条に当年二十五歳と西行自身の言葉があるので、逆算して元永元年の誕生と知られる。たまたま一世の風雲児平清盛と同年である。また没年は『長秋詠藻』拾玉集『拾遺愚草』等に一致して、文治六年二月十六日としている。

【事蹟】義清は武門の出自にふさわしく、土のにおいのする健康な幼童期をもった。長じては保延元年(二三五)十八歳で兵衛尉に任ぜられ、やがて鳥羽院の下北面に仕え、武芸はもちろんのこと唱歌や蹴鞠をたしなむ。またいつの頃からか、徳大寺(実能)家の家人でもあった。彼が待賢門院璋子(実能の妹)やその子崇徳院の一統に終生心を寄せたのも、この因縁からである。保延六年十月十五日、二十三歳の若さで、突如として出家。時の内大臣藤原頼長はこれを「自俗時入心於仏道、家富年若、心無愁、遂以遁世、人歎美之也」(台記・永治二年三月十五日の条)と書きとめていた。しかし、その出家の動機ないし理由については、道心か数奇か、あるいは時代の不安か個人的挫折か自己変革のためか、単一には割切れまい。おそらくそれらが複雑にからみあった心境のなかから、多少とも迷いながらのやや気負った選択であったろう。「惜しむとて惜しまれぬべきこの世かは身を捨ててこそ身をも助けぬ」(玉葉集・雑五)は鳥羽院に出家の暇乞いをするときの歌。「身を捨つる人はまことに捨つるかば捨てぬ人こそ捨つるなりけれ」もおそらく出家

のときの詠で、後年『詞花集』雑下に読人知らずとして入集した。これらの詠は未練や迷いと烈しく対決して、自己を救い自己を生かす道をむしろ自分自身にきびしく言いよきかせる姿勢の歌でもある。出家後の数年間は、東山・鞍馬・嵯峨・醍醐など、京周辺の寺々や草庵を転々としての修行期である。「身のうさのかくれがにせむ山里は心ありてぞ住むべかりける」(山家集・中)と山里を肯定するが、同時に「鈴鹿山うき世をよそにふり捨てていかになりゆくわが身なるらむ」(山家集・中、新古今集・雑中)と明日の不安をすなおに歌い、また「世の中を捨てて捨て得ぬ心ちして都はなれぬ我が身なりけり」(山家集・下)と今日の不徹底をきびしく反省する。永治元年(二四二)崇徳帝の讓位、翌康治元年待賢門院の出家、久安元年(二四四)同女院の他界。待賢門院堀河・同中納言など、女院に仕えた女房たちも以後はうらぶれた日々である。徳大寺園に深くつながる青道心西行の胸中は暗く、はるかに修行の旅を思うか、久安三年三十歳のころ、初度の陸奥への旅に出る。この廻国修行は、一つには能因の昔を偲び、奥州の歌枕探訪をかねる旅でもあり、更には同族の長者秀衡の本拠地(それは同時に佐藤一族の遠い故郷)の現実を親しく見定めるためでもあったろう。秋には「白河の関屋を月のもる影は人の心をとむるなりけり」(山家集・下、後葉集)と関の柱に書き付け、十月十二日には平泉に到着、吹雪のなかを直ちに衣河に行き、城を見据えている。翌年三月には出羽の国にも足をのびし、やがて晩秋の下野の国を経て帰京。二年にわたる、余裕のある明るい旅であった。この奥州行脚の後には、高野山を本拠として真言僧とし

ての本格的な修行に入るが、以後また四国への長旅に出るまでの約二十年間を高野中心修行時代の前期とする。但しこの期間も終始高野に籠ってばかりいたのではなく、都への往来をはじめ、遠近各地への旅にもしばしば出かけている。「山家集」に関係作品をどめ、「古今著聞集」にも語られている「大峰入り」の難行も、この期間、それも奥州から帰って間もない頃のことろみであったろう。保元元年(二五七)七月鳥羽院崩御。西行はたまたま高野から下山して、その葬送にも加わり終夜読経したが、末法の世はたちまち骨肉あいせめぐ戦乱に突入してしまつた。崇徳院は仁和寺北院にのがれて剃髪。その月明の夜、西行は仁和寺に馳せ参じて兼賢阿闍梨に会い、「かかる世に影もかはらず澄む月を見る我が身さへうらめしきかな」(山家集・下)と慟哭してゐる。左大臣頼長は奈良に走って敗死、源為義・平忠正ら敗軍の武將は死刑、崇徳院も讃岐に配流。まさに武者の世であった。なお、崇徳院はその後の切なる帰京の願ひも空しく、長寛二年(二六二)怨みを残して配所に崩。それと相前後して徳大寺家の人も、保元二年に左大臣実能が、永曆二年(二六二)にはその息右大臣公能が没している。その他、西行の縁者や知友が次々に先立って他界。西行はそういう孤独のなかで、右大臣中院(藤原)雅定・大納言藤原成通等をはじめ諸卿諸人にしきりに出家を勧める。僧としての、内からの自信、他からの信頼もようやく定まりかけたのであろう。また一方では常磐三寂(寂)など隠者仲間での歌友、さらには歌壇からも顕広(藤原俊成)など心の通う歌友が定まってきている。仁安三年(二六六)はすでに五十一歳

だが、四国への修行を思い立つ。崇徳院の白峰陵での鎮魂と弘法大師の聖蹟巡拝は命あるうちに必ず果さねばならぬ宿願であった。まず十月十日、賀茂神社に奉幣して「かしこまる幣」に涙のかかるかな又いつかはと思ふあはれに(山家集・下、玉葉集・神祇)と、高齡での、しかも自ら思いたつた旅の出立に際しての覚悟をあらたにする。備前の児島では「立てそむるあみとる浦の初竿はつみのなかにもすぐれたるか」(山家集・下)、白峰陵では「よしや君昔の玉の床とともかからむ後は何にかはせむ」(同)、また善通寺の庵では「ここをまたわれ住み憂くてうかれなば松はひとりにならむとすらむ」(同)などと詠んでいる。初

度の奥州行脚の歌枕探訪とは趣を異にして、素材と視野の拡大があり、すでにおおかた自在な詠みぶりである。この四国行脚からのまた約十年間は高野中心修行時代の後期といつてよいが、この期間は社会的には天下の覇者平家の全盛期でもあった。しかし西行はこの平家政権に対してはさほどの拒否反応を示していない。むしろ承安二年(二七三)には清盛に招かれて和田浜の万灯会に参列した(山家集・中)、治承四年(二七四)には清盛に交渉して日前宮造営に関する高野山の課役を免除して貰つたりしている(宝簡集「所収」四位自筆書状)。高野における当期の西行の活躍は目ざましく、たとえば治承元年には鳥羽院皇女頌子内親王のために蓮華乗院の建立をもなしてげている。また、歌人としては承安三、四年頃、早くも家集(山家集)の原型を自撰し、これを俊成の私撰資料に供したはずである。また「治承三十六人歌合」には僧の歌仙として加えられ、やがて「月詠和歌集」には十七



首も入集した。しかし西行はこの高野の山をも住みうかれて、治承四年(六十二歳)の六月以前、伊勢に移る。この伊勢移住は天下の戦雲を予知し、静穏の地を求めての避難の意味があったか。伊勢は曾遊の地であり、神官には荒木田満良(蓮阿)などの歌友もいた。そのうえ大神宮は大日如来の垂迹という信仰があった。「深く入りて神路の奥をたづぬればまた上もなき峰の松風(御裳濯河歌合、千載集・神祇)の作にその信仰が披瀝されている。また伊勢における西行の歌話を書きとめた蓮阿の『西行上人談抄』に「和歌は常に心すむ故に悪念なくて、後世を思ふもその心をすすむるなり」とあり、数奇即仏道の意識が顕著である。文治(二六平二六)の初めごろ、大神宮法案のため、藤原定家・同家隆・慈円・寂蓮らに「二見浦百首」を勧進。そして文治二年の初秋、六十九歳の老軀をばげまして、再び奥州へ下向する。先年平重衡によって焼き払われた大仏殿再建のため、平泉の同族秀衡から砂金を勧進するのが目的である。「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山(新古今集・騎旅)、「風になびく富士の煙の空に消えてゆくへも知らぬわが思ひかな(西行上人集、新古今集・雑中)など、万感のこもる旅であった。八月十五日、鎌倉に立ち寄り、征夷大将軍源頼朝の求めに応じて一夜弓馬の道を談ずるが(吾妻鏡)、この頼朝は平泉の鎮守府將軍秀衡と今や宿命的に対峙する存在であった。西行はやがて平泉に入って秀衡に再会し所期の目的を達するが、無事に帰来したのはおそらく文治三年の春ごろ。伊勢には帰らず京は嵯峨の草庵に落着く。そして大神宮に自歌合を奉納すべく『御裳濯河(新古今集)』歌合、『宮河歌合』

を自撰し、俊成と定家にそれぞれの判詞を乞う。翌四年には『千載和歌集』が成り、西行は『口位法師』として十八首入集。更に翌五年のなかばごろ、佐藤一族の田仲庄にも近い、河内の弘川寺に最後の庵を結ぶ。『宮河歌合』に対する定家の判詞は二年もの歳月をかけて、この年の十月やつと西行の許に届けられた。折から西行は病臥中だったが、定家の新鮮な判詞に対するよろこびを返書(贈定家卿文)に認めた。その文中、すでに歌の「かみ」に対する自覚が見えるのは、和歌史上注目し値する。また最晩年の西行が未だ少年であった明恵を神護寺に訪れ、「一首読ミ出テハ一休ノ仏像ヲ造ル思ヒヲナシ(明恵上人伝記)と、詠歌と信仰が一如の心境を語つたと伝える。「願はくは花のしたにて春死なむそのきさらぎの望月のころ(山家集・上、続古今集・雑上)という素懐の如く文治六年の二月十六日、七十三歳で入滅。

【作品】『新古今集』には九十四首入集し、集中第一等の歌人となる。その他勅撰集入集歌は匿名入集の『詞花集』一首を含めて、計二六六首にのぼる。家集は『山家集』、『西行上人集』、『聞書集』、『残集』など数種が伝存する。『山家心中集』、『御裳濯河歌合』、『宮河歌合』は自撰の秀歌選としてとくに注目される(↓山家集)。『後鳥羽院御口伝』に『西行は面白くて、しかも心も殊に深く、ありがたくいできがたきかたも共に相兼ねて見ゆ。生得の歌人とおぼゆ。…不可説の上手なり』と評される。(生國)二八二六 (谷山 茂)

【参考文献】佐佐木信綱・川田順・伊藤嘉夫・久曾神昇『西行全集』昭和16年、文明社。○風巻景次郎『西行(風巻景次郎全集8、昭和46年)』○窪田章一郎『西行の研究』昭和36年。○久保田淳『新古今歌人の研究』昭和48年。○安田章生『西行』昭和48年。○目崎徳衛『西行の思想的な研究』昭和53年。○久保田淳編『西行全集』昭和57年、日本古典文学会。

年)。○窪田章一郎『西行の研究』昭和36年。○久保田淳『新古今歌人の研究』昭和48年。○安田章生『西行』昭和48年。○目崎徳衛『西行の思想的な研究』昭和53年。○久保田淳編『西行全集』昭和57年、日本古典文学会。

西行さいぎやう 一冊。御伽草子。別称「さいぎやうの物がたり」。室町時代の成立か。筑土本に元和四年(二六八)の奥書。『西行物語』とは別作品。【梗概】鳥羽院の御内、佐藤兵衛義清(鈴)は歌に秀でていたが、女院を垣間見てより恋の病に臥した。理由を知った女院は一度姿を見せるが、その後も彼が会いたがるのを聞き、「あこぎ」と書いて渡す。謎の解けない彼は出家して西行と名のる。伊勢への途上、牛飼に「あこぎ」の謎を教えられる。七年間修行の後上京し、女院と和歌の贈答をする。旧宅に立ち寄ると、主と気づかない郎等が彼を打擲する。西行の娘が郎等をたしなめる。初め西行は名を隠すが、やがて父と判る。郎等は出家して西住と名のる。娘は参内し、繁栄した。西行は道心堅固の歌僧として名を揚げた。【特色】歌の達人、且つ道心の人として尊崇された西行への興味が創作契機を支える。娘の親孝行の強調。繁栄の結末等、婦女子の読物としての性格の反映を思わせる。素材として様々な伝説、説話を利用。同様の西行出家譚は、『源平盛衰記』巻八、謡曲『阿漕』に見え、また、西行の打たれる話、旧宅荒廢、娘との再会等の話は『西行物語』、『今物語』、『撰集抄』、『発心集』の西行説話とも一部通う。その他、諸説話集の類話も多数指摘でき、御伽草子の一特色をみせる。牛飼の話等、昔話『西行と小僧』に通う一面もある。【諸本】筑土鈴寛旧蔵

本。高山市歎喜寺蔵本。【翻刻】西行全集(文明社。筑土本)。西行全集(日本古典文学会。歎喜寺本)。室町時代物語大成5(歎喜寺本)。(木下資一)

西行桜さいぎやうざくら 謡曲。三・四番目物。夢幻能。五流現行曲。世阿弥作か。古名『西行』。【梗概】西行(ワキ)が西山の庵室で花見を禁制せよと能力(アイ)に命ずるので、都の花見客達(ワキツレ)がやってくるので、西行は「花見にと群れつつ人の来るのみぞあたら桜のとがにはありける」と詠ずる。その夜の夢に、桜の老木の精(シテ)が現れ、無実を陳じて歌舞を舞う。【素材】趣向『山家集』、『玉葉集』春下の西行の歌により構想したもの。『五音』に前半部のみ本曲と共通の『西行哥』を収め、『申楽談儀』に「阿古屋松」とともに『西行』を後世のため書き置く由があるが、「西行哥」及び『西行』と本曲との具体的関係は不明。ただしシテの人体、舞の段の形態、舞の段前後の音曲的構成、情趣中心の風流能であることなど、「阿古屋松」に酷似し、「西行」が本曲である可能性は強い。『申楽談儀』に本曲を「昔のかかり」というが、「阿古屋松」と共通するような後場の構想に古風な面を残しているらしい。【翻刻】日本古典全書『謡曲集・中』。日本古典文学全集『謡曲集(一)』。日本古典文学大系『謡曲集・上』。謡曲大観2。西行全集(日本古典文学会)。(竹本幹夫)

【参考文献】市古貞次『中世文学と西行』通世談の一系譜(『中世文学』昭和40年5月)。

西行上人談抄さいぎやうじんのたんしょう 一冊。和歌。鎌倉時代の歌論書。蓮阿(れんあ)著。「西公談抄」西行法師談義抄「西行日記」とも。嘉

録安貞(三五・三九)頃に成るか(中世の文学)『歌論集』(『解説』)【内容】西行の歌話を筆録したもの。伊勢在住時代の西行に師事して多くの歌話を聞いたらしい、大神宮内宮の祠官荒木田(尾崎次郎)満良、法名蓮阿が、西行没後三十年以上たつてから、メモと記憶によって記した聞書である。かつて偽書とされたこともあるが、西行の談としてふさわしい内容を有する。『古今集』の雑部を詠歌の手にすべき旨を説き、秀歌例を掲げ、和歌説話を語り、行住坐臥に歌を思うことの重要性や、和歌は心が澄んで悪念を消す効用があること、連歌の心得、なども説かれている。【諸本】宮内庁書陵部本・内閣文庫本・彰考館本・神宮文庫本など伝本は少なくない。神宮文庫蔵『西行日記』は近世に注釈を加えた本である。【翻刻】群書類従・和歌。三十輯4。『纂訂西行法師全歌集』(伊藤嘉夫、昭和10年)。日本歌学大系2。中世の文学『歌論集(一)』。西行全集(文明社。神宮文庫蔵『西行日記』。西行全集(日本古典文学会。内閣文庫本・神宮文庫蔵『西行日記』)。「安田純生」

西行物語 さいぎょうものがたり 二巻。物語。「西行

発心の記」「西行和歌修行」「西行四季物語」「西行一生涯草紙」などと題する伝本もある。【成立】鎌倉末期書写の伝本があること、『とはずがたり』に「西行が修行の記の絵」として引いているのがこの物語の一種らしいことなどから、原形は鎌倉中期には成立していたと思われる。【内容】平安末期の歌人西行の一生を、実録風に記したものの。西行の家系から説きおこし、鳥羽院の

北面の武士として文武両道にすぐれていた佐藤義清(義清)が、親友の急死に触発されて出家したこと、出家後しばらくは洛外にわび住まいをしていたが、やがて吉野・熊野・伊勢をめぐる風雅を求め、中国・四国・奥州の旅をし、なお絶ち切れぬ因縁から都にもどって娘と再会したこと、さらにその娘や妻の出家を記し、彼自身は、建久九年(一九〇二月十五日)願はくは花の下にて春死なんそのきさらぎの望月のころ」と歌いあげて往生した(実際は文治六年二月十六日没)ことを述べ、最後は都の歌人たちの哀傷の歌をもって結ぶ。『山家集』『西行上人集』など、西行の家集その他を資料としたもので、事実をふまえるが、説話的な素材をも多く取り入れて、求道心にみちた詩人の一生らしい造型をしている。家集からは、西行の行動をうかがうことのできる詞書を持つ作品をえらんで、詞書を生かした文章でたくみに話をつなぎ、今日でも有名な彼の歌は、一通り取り入れてある。一方、説話は、何を資料としているか不明であるが、出家に際し泣きすがるわが子を縁から蹴落として恩愛のきずなを絶ち切る話や、天竜川の渡して同船の人に傷つけられながらも同行の西住を京へ追い返してひとり旅を続ける話など、この物語によってはじめて世に知られた説話がある。【諸本】

歌を中心にした構成方法から、最初は絵巻として成立したものか、ともいわれる。ただし、資料として拠つたものが家集であることにも起因しているよう。諸本は写本・絵巻・奈良絵本・版本など、四十数本伝わっている。その中で書写年代がもっとも古く内容の簡略な静嘉堂文庫蔵伝阿仏尼筆本が原型で、それが増補成長して四系統に分かれ

たという川瀬一馬説がある。しかし同本については、増補本からの抄出という過程も考えられ、確定しない。諸本の中で、『西行物語絵巻』系統の本文は、冒頭に仏教観を述べる文章が加わっているのが特徴である。絵巻の中で、徳川黎明会蔵本や万野家蔵本は、鎌倉期の制作になるもので、多くの絵巻物全集に収められている。伝本の中で版本が多様多様であることも特徴で、これは江戸時代に西行の生涯がいよいよ注目され、多くの文人たちに影響を与えていること、の現われである。西行の伝記は、家集よりも、この物語や『撰集抄』によって印象づけられることが多かったのである。【複製翻刻】続群書類従32輯上。西行全集(文明社)。西行全集(日本古典文学会)。版本文庫。室町時代物語大成5。古典籍複製叢刊(静嘉堂本)。『西行物語絵巻』(大和絵同好会、昭和2年)。『西行記』(便利堂、昭和9年)。新修日本絵巻物全集。日本絵巻大成。【桑原博史】

西行物語絵巻 さいぎょうものがたり 残欠二巻。絵

巻。第一巻徳川黎明会蔵、第二巻万野家蔵。作者未詳。鎌倉時代製作。西行出家の経緯と吉野・熊野路の旅の逸話を描いたもの。【内容】第一巻一詞三段(第四段欠)、絵四段。出家を決心して嵯峨の聖のもとで剃髪するまで。第二巻一詞六段(第一段欠、第四・七段後補)、絵七段。出家後の歳晚を

迎え、いよいよ旅に出る。吉野に桜をたずね、熊野路をめざし紀州千里浜で俊恵入道の夢を見、やがて途中から同行した修験者の一行と別れるまで。清楚な色調と練達した描線による風雅な品格を保ち、殊に風景描写は大和絵の四季名所絵の伝統をつぎ、情緒的である。詞書の筆跡は法性寺流を主として。【諸本】異本として『西行物語』(絵巻三巻、室町時代作)、『西行法師行状之絵』(四巻、室町時代海田相保筆禁裡本を寛永七年(一六三〇)宗達法橋に模写させたとする鳥丸光広の奥書を持つ)がある。外に同種の六巻本がある。↓西行物語

採玉集 さいぎょうしゅう 初編十巻、後編六巻(た

だし、巻の分け方不明)。和歌。初編は吉田正準編集着手、子の孝継完成、文久二年(一八三二)九月凡例、文久三年五月跋。後編は吉田孝継編、慶応三年(一八六七)三月凡例。未刊。【内容】土佐の人々の和歌の撰集。初編は元禄(一六八八)から文久元年に没した人まで一五〇人の歌三五九〇首を、後編は天保(一八三〇)から慶応三年春までの一三三人の歌三千五百余首を収める。部立は、春・夏・秋・冬・恋・雑・橋旅・離別・物名・哀傷・祝および長歌。春の歌が最も多く、四季の歌が七割前後を占める。選歌の標準は「しらべを第一とし、つぎに趣向よく」とのひたるを採ったとある。初編で歌数の多いのは、安並雅景・尾池春水・吉田正準・谷貞潮・鹿持雅澄・馬詰親音(親)・今村楽(百首以上所収)。本書は近世土佐最大の和歌集で、地方文学史料として重要である。【翻刻】『採玉集』(青山文庫編、昭和8年。青山文庫本の謄写刷。初編のみ)。皆山集10(高知

【参考文献】川瀬一馬『西行物語の研究』(日本書誌学之研究昭和18年)。○伊藤嘉夫『西行物語』のたねとしくみ(跡見学園国語科紀要12、昭和39年3月)。○坂口博規『西行物語考』(駒沢国文13、昭和51年2月)。○谷口耕一『西行物語の形成』(文学、昭和53年10月)。

県立図書館編、昭和53年。初編のみ、長歌  
略)。(吉野 忠)

### 西吟

俳人。姓は水田、名は元清、通称は庄左衛門。桜山子・落月庵、岡松軒とも号した。もと摂津国嚴原の人。摂津守荒木村重の家臣水田和兵衛の四世に当たら。水田家は代々和歌・連歌をよくする風流の家柄であった。宝永六年(一七九)三月二十八日没(在岡俳諧逸士伝)。享年未詳であるが、七十歳は越えていたものと推測される。【閨歴】はやくから大阪に出て、西山宗因に俳諧を学び、のち井原西鶴に従った。寛文期(一六六一一六五)以前の俳歴は未詳で、明暦三年(一六五七)刊西武編『沙金袋』に大阪元清の句が見えるが、西吟であるという保証はない。延宝四年(一六五五)五月、『屋網集』(伝本未詳。水田元清の序文のみ残る)の万句を興行して立机、それより西吟を号し、大阪中町に俳諧の会所を開いたものと思われる。ちなみに西吟号の初見は延宝五年である。この年にはすでに、三十年間住みなれた大阪を去り、居を摂津国桜塚に移している。その住まいを落月庵と名づけ、庭に桜・躑躅などを植え、それにちなんで「桜万句」「羊躑躅(ひつ)万句」を興行するなど、風流の日を過ごした。西鶴との交際は、延宝五年五月、能書の才をかわれて『大句数』の執筆(ひつ)を勤めたのに始まる。以後、ほとんど常に西鶴の側近にあり、執筆・連衆として活躍、俳書ばかりでなく、『好色一代男』など浮世草子の版下をも書いて西鶴に協力した。俳友には伊丹俳壇の雄鬼貫・百丸らがあり、門人も多く(貞享三年歳旦帖)には五十人の名が見える)、『花見車』に「富田池田のさはぎ所にてはんじや

う也」と評された。【著作】『鬼の目』『庵』寝ざめ廿日』『難波桜』『やよい山』『塩味(ひつ)集』『菜の花』『橋柱集』『宇津不之曾女(ひつ)』『俳諧大意』『ほのく草』『外海集』など、数多くの俳書を編んでいる。(園?一七九)

【参考文献】多田沙平『桜塚の西吟に就て』(上方16、昭和7年4月)。○荻野清『才磨西吟・団水・風虎・露沾』(続俳句講座1、昭和9年、改造社)。○杉浦正一郎『西吟の研究』(国語と国文学、昭和23年5月)。○田中義真『西吟の研究』(宗因、西鶴との関係を中心として)(国文学、関西大学2、昭和25年10月)。○桜井武次郎『元禄の大坂俳壇』(昭和54年)。

### 齋宮

「いつきのみや」ともよみ、齋内親王・齋王ともいう。伊勢大神宮に奉仕する未婚の内親王または女王。垂仁天皇二十五年、皇女倭姫命が天照大神の託宣によつて伊勢国に社を建て、五十鈴川のほとりに齋宮を設けたのを最初とし、後醍醐天皇の皇女祥子内親王が卜定されたのを最後とする。【儀制】天皇の即位の初めごとに卜定して、一人が選ばれ、三年の精進齋の後、伊勢に下向する。天皇の崩御・讓位、齋宮の父母の喪によつて交替する。齋宮を卜定すると、幣帛を大神宮に奉り、その由を奉告し、齋宮を宮城内の便殿に移居させる。これを初齋院という。翌年七月まで此処で潔齋し、八月より宮城外の新宮に入居。これを野宮という。野宮は嵯峨野にあり、その遺跡は現在も野宮神社として存する。ここで潔齋三年の後、九月上旬吉日をえらび伊勢に発向する。出発の当日、天皇は大極殿に出御、親しく櫛を齋王の髪にさし、口ずから「此の間、都の方にますな」と宣べる。これを「別れの櫛」という。

さらに宮中を退出するとき、ふりかえることを忌む。この際、多勢の供人をつれて行く。これを群行という。種々の障害があつて、群行なく、野宮から退下する齋王もあつた。伊勢に着くと齋宮の館に住み、一定の祭祀の時に大神宮に向向いて奉仕する。齋宮の館は伊勢多氣郡にあることから「多氣(ひつ)の宮」と称される。伊勢齋宮に関する一切の事務をつかさどる役所を齋宮寮という。内院・中院・外院に分かれ、内院は齋宮の御座所、中院は寮頭以下の詰所である。【齋宮と文学】歴代の齋宮の中には、微子女王(齋宮女御)のようにすぐれた歌人も見出される。『采花物語』『大鏡』『増鏡』などの歴史物語や『とはずがたり』には実在した齋宮に関する逸話が語られているし、『伊勢物語』『大和物語』『源氏物語』などにも齋宮に関する記事は少なくない。また、『女四宮歌合』や『齋宮女御微子女王前歌合』『齋宮貝合』など、野宮や齋宮の館が詠歌の場となつた例もあり、『後拾遺集』には齋宮を通して託宣された伊勢大神宮の神詠も採られており、齋宮と古典文学との関係は深いものがある。↓齋院 (山中 裕)

さらには宮中を退出するとき、ふりかえることを忌む。この際、多勢の供人をつれて行く。これを群行という。種々の障害があつて、群行なく、野宮から退下する齋王もあつた。伊勢に着くと齋宮の館に住み、一定の祭祀の時に大神宮に向向いて奉仕する。齋宮の館は伊勢多氣郡にあることから「多氣(ひつ)の宮」と称される。伊勢齋宮に関する一切の事務をつかさどる役所を齋宮寮という。内院・中院・外院に分かれ、内院は齋宮の御座所、中院は寮頭以下の詰所である。【齋宮と文学】歴代の齋宮の中には、微子女王(齋宮女御)のようにすぐれた歌人も見出される。『采花物語』『大鏡』『増鏡』などの歴史物語や『とはずがたり』には実在した齋宮に関する逸話が語られているし、『伊勢物語』『大和物語』『源氏物語』などにも齋宮に関する記事は少なくない。また、『女四宮歌合』や『齋宮女御微子女王前歌合』『齋宮貝合』など、野宮や齋宮の館が詠歌の場となつた例もあり、『後拾遺集』には齋宮を通して託宣された伊勢大神宮の神詠も採られており、齋宮と古典文学との関係は深いものがある。↓齋院 (山中 裕)

### 齋宮貝合

一巻。和歌。平安時代の歌合。作者未詳。無判。良子内親王(後朱雀天皇第一皇女)が齋宮在任中の長久元年(一〇〇〇)五月六日庚申に催した貝合に付随する歌合。【内容】物合の貝合が主で、和歌は、洲浜(あそ)の趣に依じて詠まれた左二十首、右十九首が記されているだけで、つがえられてはいない。歌題は、舟貝・梅の花貝・いたや貝など十数種の貝の名、二見浦・白良浜など洲浜に仕立てられた名所、岩間に板屋貝をやがて家に造りたり」のよ

うな洲浜の趣向などがとられている。方人(ひつ)や歌人は一切不明だが、齋宮の官人女房が当つたものであろう。女房の筆になるとみられる詳細な仮名日記や和歌には豊かな文才が感じとられ、藤原頼通の息のかかつた文芸園とは別の、才女を集めた華麗な齋宮文芸園の存在が想像される。貝合の唯一の資料として貴重であるとともに伊勢の海を中心とする海岸に棲む貝の名を多数残している点でも注目される。洲浜と歌にあらわれた名所への興味は、長久二年の「祐子内親王家名所歌合」にもみられるように、当時流行の兆を見せかけていたものであろう。【伝本】陽明文庫蔵二十巻本『類聚歌合』所収本が孤本として存するが、本文に不備な点も見られる。【複製】陽明叢書『平安歌合集・上』。【翻刻】『纂輯類聚歌合とその研究』(堀部正二、昭和20年)。日本古典文学大系『歌合集』。平安朝歌合大成3。 [齋藤照子]

### 西宮記

平安時代の歌人。本名、微子(ひつ)女王。別称、承香殿女御。醍醐天皇皇子で詩文の大家である式部卿宮重明親王の女。母は太政大臣藤原忠平(貞信公)の女寛子。寛和元年(八五五)没、五十七歳(大鏡裏書)。三十六歌仙の一人。【閨歴】承平六年(一一三六)九月、齋宮に卜定。天慶元年(一一三九)九月、伊勢に下向。同八年正月、母の喪にあい、七月退下。天曆二年(一一三〇)十二月末村上天皇に入内、同三年四月女御宣下。同年第四皇女親子内親王を生む。応和二年(一一三二)九月出産の皇子は即日夭死。和歌・音楽に長じ、趣味を同じくする天皇の寵は深かつたが、天曆八年九月、父親王

他界後は、里邸に籠りがちだった。康保四年(九七)五月天皇崩御。その後八年の円融天皇の天延三年(九七)二月、規子内親王が齋宮に卜定され、翌年二月初齋院、九月野宮に移り、貞元二年(九七)九月十六日伊勢に発向。心に決するところのあった微子女王は、慣例を破ってその跡を追って同行再び伊勢の人となった。八年後の永観二年(六八)八月、規子内親王は任を解かれて帰京。微子女王が同行したことは家集で推定される。その前後に尼となったのは病のためか。寛和二年五月の規子内親王他界に先立ち、その前年に没した。【作品】家集『齋宮女御集』。勅撰集入集は、『拾遺集』四首、『後拾遺集』七首、『新古今集』十一首、『統後撰集』以下に計二十二首、合せて四十五首。天曆十年春夏の交、麗景殿女御苅子女王、宣耀殿女御芳子と並んで催した歌合は、天曆宮廷歌壇における地位の重さを示し、規子内親王の野宮における庚申の夜の歌合には、「松風入夜琴」の題で「琴の音に峰の松風かよふらしいづれのをよりしらべそめけむ」拾遺集・雑上の名歌をのこした。女御という身分で、その心情を独詠歌や贈答歌に吐露した作の多いことは、特に貴重である。沈潜した調べと優艶な情緒を漂わせた佳品が多い。宮廷内外の人々に敬慕され、それは没後、家集が何次にもわたって編まれたことから察することができる。

【参考文献】山中智恵子「齋宮女御微子女王」昭和51年。 [森本元子]

齋宮女御集 さいくうのくに 一冊。和歌。齋宮女御微子女王の家集。一名「齋宮集」。三十六人集の一。【成立】成立過程について

は種々の推定が可能であるが、一つの考え方を示す。寛和元年(九七)微子女王他界の後、手もとの歌反故が側近女房の手でまとめられ第一次本が成った。康保四年(九七)の村上天皇没後にその側近者間で記録された天皇と女御との贈答歌をとり入れて第二次本Aが成った。一方、第一次本に人々が女御と交した歌の増補が施され、量的に倍する第二次本Bが成立。以上を集成し、配列や本文に修補を加えて、定本としての第三次本が成った。この仮説にもとづくと、第一次本には正保版歌仙家集本系一〇二首が、第二次本Aには宮内庁書陵部本(一六三首)が、同Bには小島切が、第三次本には西本願寺本三十六人集系(二六五首)が、それぞれあてられることになる。長徳二、三年(九七)頃成立の『拾遺抄』所収の作からみて、西本願寺本三十六人集系の原型もその頃までに成立したと推定できる。

【内容】所収の歌は、天曆二年(九七)末人内の当時から、寛和元年薨去の直後まで三十七年間にわたっている。前半は村上天皇崩御に至るまでの作、後半は天延三年(九七)再度の伊勢下向を中心とする作。前半では、特に村上後宮における女御としての哀歎をうたったものが目立ち、後半では伊勢に到着、そこに在住中の作が感動をさそられる。その間、都の多くの人々との交流がみられる。【諸本・複製翻刻】西本願寺本・小島切ともに十二世紀初頭の筆写として貴重。西本願寺本は、三十六人歌集、西本願寺本三十六人集に複製所収、『西本願寺本三十六人集精成』久曾神昇、昭和41年)に翻刻所収。小島切は、尊経閣叢刊、『道風小島切』昭和40年)等の複製がある。流布本としては歌仙家集本が、群書類従・和

歌、続国歌大観、校註国歌大系12等に早くから翻刻され、日本古典文学影印叢刊『平安私家集』、御所本三十六人集に複製所収本も同系に属する。書陵部本は桂宮本叢書1に翻刻されている。私家集大成・中古1に四系統とも翻刻がある。【森本元子】

細見

「新吉原細見記」、すなわち江戸新吉原廓内の娼家・揚屋・茶屋などが町ごとに順列記載され、妓格によって分別された遊女名がその所属する娼家ごとに記されている絵図または冊子の略称。【刊行の沿革】細見は延宝年間(一七二一—一七三〇)から大正五年まで二百三十余年にわたって出版されたが、その初期は大絵図の形で間歌的に発行された。株板の制の定まった享保年間は頻出しはじめ、享保十二年(一七三七)の伊勢屋版および鱗形屋版で初めて半紙半截の横型冊子細見が現われ、安永年間(一七九一—一七九六)まではこれが定型となった。元文三年(一七九八)には版元は鱗形屋・山本の二軒に限られ、相拮抗して春秋二季の版行をしていた。大絵図の時代から書名に冠号されていた「細見」の語が「新吉原細見記」の略称(代名詞)として定着したのはこの頃からである。山本は宝暦八年(一七五八)春までで細見版行を止め、以後は鱗形屋の独占となったが、安永四年(一七七九)秋、蔦屋が美濃半截型で町筋をはさんで娼家が上下睨み合いになる新型細見(離(はな)の花)を出し、鱗形屋版はこの新趣向に圧倒されて安永末には絶版となった。その蔦屋は天明三年(一八二二)に細見株のすべてを手に入れ、その春の自祝の細見『五葉松』が以後細見の代名詞とな

った。判型は寛政期(一七九一—一八〇一)に半紙半截に縮小されたが、上下睨み合いの形式は変わらず、以後の定型となる。降って天保二(一八三一)の末年から弘化(一八四一—一八四六)にかけて細見版元につき紛争があったが、嘉永元年(一八二〇)秋以降、細見株は廓内の娼家玉屋山三郎の手に移り、明治五年(一八七二)までは玉屋版が刊行された。【記事内容】細見の内容は、当初廓内居住の諸商人・芸人・一般町家を網羅していたが、明和九年(一七七三)春の「新娼楼(きんごう)」以降は娼家・茶屋・船宿等の遊興に直接関係のあるものだけを登載するようになった。口絵も横本の頃は廓内風俗などの粗画を入れていたが、安永末以降は一、二の例外を除いてこれを廃した。序文は冊子型になってからは版元口上または俳諧師などが記していたが、安永三年春の「嗚呼御江戸」に平賀源内が戯文を寄せたのに始まり、蔦屋時代の細見には朋誠堂喜三二を初めとし、山東京伝・式亭三馬・曲亭馬琴・十返舎一九・山東京山などが書いているが、末流のものには見るべきものがない。細見は遊女に対する恣意的評価のない点で「評判記」と異なるし、地図の要素をもつ点で「遊女名寄せ」と一線を画する。【吉原以外の細見】細見版行は京都島原(「一目千軒」・大阪新町(「濤標」)等でも出されたが、江戸のような定期刊行はない。また、品川・新宿の飯盛女、色子、岡場所、果ては夜鷹に至る擬(まが)細見が散発的に版行された。別に、細見の形態を採って評判記の内容をもつ見立細見は、安永五年の『歌舞妓三丁伝』以下初代および二代目鳥亭馬馬の「歌舞伎細見」類、安永九年の『自遊地座居(みよ)』、以下嘉永・慶応の「歳撰記」または「細撰記」と題する名物細見、その